

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

A Study on Issues Regarding Teaching Methods for Moral Education : Based on the Image of “Good Child” and the text of Moral Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松永, 幸子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1105

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



道徳の指導法の課題についての一考察

ー 若者の「良い子」イメージと道徳の教科書 ー

A Study on Issues Regarding Teaching Methods for Moral Education

Based on the Image of “Good Child” and the text of Moral Education.

松 永 幸 子

MATSUNAGA, Sachiko

はじめに

平成29年度より、「特別の教科」として道徳が導入され、大学の教員養成課程において、教職を目指す学生にとっても、また、小学校などの学校教育現場においても、道徳をどのように教えるかが喫緊の課題となっている。そこで本論稿では、道徳の教科が育成を目指す「良い子」「道徳的な子ども」と、現実の「良い子」イメージを比較し、今後、道徳教育をどのようにしていったら良いのか、道徳教育の今後の課題についての問題提起としたい。

第1章 道徳教育の目的と若者による「良い子」イメージ

まず、道徳教育の目的は新学習指導要領第1章総則第1-2で次のように示されている。

2-（2）道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動等を通して、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めること。

学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要

として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行うこと。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とすること。

道徳教育を進めるに当たっては、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、平和で民主的な国家及び社会の形成者として、公共の精神を尊び、社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人の育成に資することとなるよう特に留意すること¹⁾。

キーワード：道徳教育、道徳の指導法、良い子、子ども、若者

Key words : moral education, moral education method, good child, child, young people

以上のように、道德教育を行う目的は、人間尊重の精神や、豊かな心の育成、伝統と文化を重んじ、公共の精神を尊重し、他国を尊重する主体性のある人間を育成することになるといえる。

では、一般的に「道德的な子ども」、「良い子」はどのような子どもを指すのか？若者は、どのようなことを「道德的」と感じるのか？現在の若者は、「道德的な子ども」、「良い子」についてどう考えているのか？そこで、教職に就くことを目指し、教職課程を履修している若者102名に意識調査を行った²⁾。

質問項目は、1、あなたは「良い子」と聞いて、どんな子どもを思い浮かべますか？

2、日本の教育は、独創的な子どもを育てると思いますか？その理由。3、どうしたら、独創的で個性的な子どもが育つと思いますか？というものである。

「良い子」とはどのような子どもなのか？これについて以下のような回答が得られた。

- ・できたことを喜び、失敗や悪いことについて反省できる。
- ・礼儀がしっかりできる。
- ・人の役に立つ。
- ・授業の予習をする。
- ・クラスをまとめられる。
- ・人の気持ちを考えることができる。
- ・素直で思いやりがある。
- ・静かにすべきところでは静かにし、反省の気持ちがある。
- ・素直で優しい。
- ・素直で気が利く。
- ・何でも平均的にこなせて皆のことを考える。
- ・人の気持ちを考えられる。
- ・宿題をきちんと提出する。
- ・まじめに授業を受ける。
- ・自分からいろいろなことに進んで挑戦する。
- ・悪いことをしても素直に謝る。
- ・時間を勉強のために使える。
- ・頭が良い。
- ・授業をしっかり聴き、友達を大切にする。
- ・何事にも一生懸命。
- ・真面目でやる気がある。
- ・静かに話を聴いてくれる。
- ・集団行動が出来る。
- ・笑顔があり常識がある。
- ・聞き分けが良い。
- ・優秀である。
- ・その場の空気をよんで対応できる。
- ・何でも素直に取り組める。
- ・扱いやすい。
- ・自分で考え行動できる
- ・行動すべきときは、行動できる。
- ・ルールを守る。
- ・人並みのことが出来て、常識を持っている。
- ・正直である。
- ・先生から見て扱いやすい。
- ・自分の気持ちを押しつけるのではなく、伝えることが出来る。
- ・他人を心から褒めることが出来る。
- ・積極的に物事（勉強に限らず）を学ぶ気がある。
- ・周りの人の気持ちを読み取り、困っている時は手伝ったり、自分の好きな子とだけではなく皆と遊んだり、自分からコミュニケーションをとることが出来る。
- ・おとなしく、真面目。
- ・いろいろな人に挨拶が出来る。
- ・何でもしっかりやる。
- ・良い事と悪い事の区別が出来る。

- ・問題を起こさない。
- ・皆に優しく、約束を守る。
- ・落ち着いていて、話をよく聴いて、理解する。
- ・メリハリがある。
- ・決まりを守ることが出来る。
- ・授業に積極的に参加する。
- ・主張が出来る。
- ・忘れ物をしない。
- ・時間を守る。
- ・落ち着きがある。
- ・ルールを守る。
- ・気配りが出来る。
- ・迷惑をかけない。
- ・人間としての仁義をわきまえている。
- ・親や教師にとって都合が良い子。大人の顔色をうかがって、大人の喜ぶことを探りながら生きている。
- ・よく笑い、よく食べ、友達を思い、先生のいうことを聞いて、てきぱき行動が出来る。
- ・提出物など決められたことをしっかりとこなす。
- ・喧嘩しても最後にはごめんなさいを出来る。
- ・困っている人がいたら手を差し伸べることが出来る。
- ・誰も見ていなくても良いことをする。
- ・自分をしっかり持っている。
- ・自分の気持ちに素直で、怒られたり悪いことをしたりすると反省できる。
- ・万引きなど悪いことに手を出していない。
- ・自分の考えを主張でき、自分を理解して行動できる。
- ・善悪が判っている。
- ・扱いやすい。
- ・愛想が良い。
- ・悪いことをしない。

- ・他人のことを悪く言わない。
- ・大人のいいつけを守る。

以上を概観すると、次のようなことが言える。道徳的な「良い子」とは、「素直でルールを守り、優しく礼儀正しく、集団行動が出来る。先生のいうことを良く聞く扱いやすい子ども」である。特に多かったのは、「素直」、「真面目」、「静かに話を聞く」などである。

彼らのこの「良い子」イメージは、どのように形成されてきたのだろうか？それを探るための一助として、「良い子」イメージを新しい道徳の教科書の内容と照合してみることにしよう。

第2章 道徳の教科書が教えたいこと

今回主に参照するのは、教育出版の最新の教科書である。

まず、1年生の教材には以下のものがある。概要を示す。

1年生

25 はしの上のおおかみ

オオカミは、橋の上で、ウサギなど他の動物を通さないなどいたずらをしていたが、ある日、熊に抱えて通してもらったことで、自分もうさぎを抱えて通してやるなど優しくなる。

他者に対し威嚇的な態度をとっていたオオカミが、熊から優しくしてもらったことで、自分も弱者に対し親切になる。

ここでの学習指導要領に則ったテーマは「親切、思いやり」である。

2年生

6 「え本のひとりごと」図書館から借りた

本が「ここから出して図書館に返して」と話し、主人公は図書館に返しに行く。

図書館から借りた本はしっかり返すというルールを守ることの大切さが描かれている。

ここでのテーマは、「節度、節制」とされている。

15 あとすこし

主人公は、苦手ななわとび（二重とび）の練習を何度も繰り返す、ついにはできるようになる。

苦しいことも辛抱して努力するという姿勢が示されている。

テーマは、「希望と勇氣」、「努力と強い意志」となっている。

16 ゆかみがき

なおくんとあやかさん以外、皆はグラウンドで遊んでいるが、二人は教室を掃除してきれいにしている。午後から教室はとてもきれいになっていて、皆が気持ち良く勉強できる。

ここでは、勤勉に努力する児童の姿が描かれている。

テーマは、「勤労、公共の精神」

3年生では、以下のような文章が掲載されている。

19 漢字ちょ金、1000ポイント

漢字練習をすると「漢字ちょ金」でポイントをもらえる。友達が漢字練習を行い、100点を取る。1行ずつ努力して練習する。先生からボーナスポイントをもらう。

やはりここでも、遊びたい気持ちをこらえ、苦しい勉強に懸命に励む子どもの姿が描かれている。テーマは、「希望と勇氣、努力と強い

意志」である。

23 音のこうずい

電車の中で、お年寄りの男性が乗り込んで来て一人でぶつぶつ言う。ドアのそばの大学生の男性のイヤホンからシャカシャカと音がもれる。座っている女性の携帯電話が鳴る。携帯で話し始めて、なかなか終わらない。別のおじさんの携帯が鳴る。若い男性がパソコンがうつ音が、カタカタとする。先程のお年寄りの男性が、「ここをどこだと思ってるんだ!」と怒鳴る。最後の設問として、「*みんなが気持ちよく電車にのるためには、どうしたらいいのでしょうか。」と添えられている。ここでのテーマは、「公德心、規則の尊重」であるが、社会のルールを守って、皆のことを考えることが重要だという答えに導く話になっているといえる。

4年生の教科書では次のようなものが取り上げられている。

3 気持ちのよいあせ

夏休みに学級園の水やりに行き、畑の手入れをする。うさぎ小屋の飼育員が欠席し、飼育員が一人で困っていて、うさぎ小屋の掃除の手伝いを頼んできた。掃除を手伝い、気持ちの良い汗をかいだ。

ここでも、遊びたい気持ちを抑えて、学級園の水やりや、うさぎ小屋の掃除など、皆の為にきつい仕事、奉仕をすることの重要性や気持ちの良さ、ということが示されている。

ここでのテーマは、「勤労、公共の精神」である。

4 生かされたお金

二人のわか者が森の中で見つけた不思議な石から大金を得る。1人は皆にごちそうし、働かなくなり、お金を使い果たす。あと一人は、石で得たお金で牛馬を購入し、畑を耕し、他の人の畑も手伝い、「りっぱだ」と称賛されるようになる。

ここでは、金銭をどのように使用するか？長い目で見て金銭や利益を「生かす」にはどうすべきか？という問題に対し、他人におごったり、先を考えずに使うより、派手なことはせず、真面目に地道に計画的に働く人間が最後には称賛される、という話になっている。

テーマは、「節度、節制」となっている。

5年生では、どうであろうか。

1 心をつなぐあいさつ

「おはようございます」登校してくる人にあいさつをする。整列して挨拶をする絵。ある日、些細なことで母親と喧嘩した主人公。交通指導員のおじさんが「スマイル、スマイル！今日も1日、元気なえがおで、ね！」「おはようございます。今日もありがとうございます！行ってきます！」おじさんに挨拶を返す私。

ここでは、たとえ気持ちが暗くても、笑顔を中心掛け、皆に毎日大きな声で明るく挨拶をする主人公が描かれ、挨拶の大切さが示されている。

テーマは「礼儀」とされている。

6年生では、次のような教材がある。

2 自分の勝手

主人公が父親と乗っていた電車の中で、複数の男の子がドアから降りたり、すぐにドアに飛び乗る遊びをしていた。周りが注意する

と、「けがしようこっちの勝手だ」という。そこに主人公のお父さんが注意するが、やはり男の子たちは聞き入れない。

ここでは、周りに迷惑をかける男の子たちが描かれ、周囲に迷惑をかけない生き方について考えることが提示されている。

テーマは、「善悪の判断、自律、自由と責任」となっている。

このように、具体的に道徳の教科書を見ると、それが目指している「良い子」像が浮かび上がってくる。そしてそれは、若者たちの「良い子」イメージにぴったりとあてはまる。すなわち、「思いやりがあり」、「周りに迷惑をかけない」、「真面目で」、「規律を守る」子どもである。このように見てくると、一般的な「良い子」概念は、これまでも、道徳教育が果たしてきた役割が大きいといえるのではないだろうか。

第3章 「良い子」は独創的、個性的な子どもではない？

ところで、前章で「良い子」イメージを見たが、それは、個性的な子どもといえるのだろうか？答はノーである。「良い子」は、必ずしも「独創的」で「個性的」な子どもではないようだ。今回のアンケートにより興味深い結果が導き出せた。

「日本の教育は、独創的な子どもを育てると思いますか？」という問いに対し、「はい」が17名、「いいえ」が82名であった。（無回答3名）

このように、日本の教育は独創的な子どもを育てていない、とする人が約8割で圧倒的だった。

この衝撃的な結果の理由として、以下のよ

うな回答が得られた。

- ・今の日本を見ていると、はみ出し者は受け入れてもらえず、個人より団体を受け入れるような感じがある。
- ・自分で考えるというより、先生に言われたからやるという授業が多い。
- ・小学校の時点で「皆と同じ」「これが“ふつう”」と教えられてきた。
- ・皆同じことをやらされている気がするから。
- ・子どもの個性的な主張よりも、決まっている考え方などを教えている。
- ・自分が想像力の乏しい人間だから。
- ・海外の教育を知ってから、(日本の教育は独創的な子どもを育てていないと)思った。
- ・いろいろと法律があるのは仕方ないが、縛り過ぎている気がする。
- ・自分も含め、一人でするのはいやで、誰かがしないとやらない、という子が多い。
- ・ごく普通の教育だから。
- ・「あれをしろ」「これをしろ」というのが強いから。
- ・美術なども、何をつくるかはだいたい決まっているし、学びたいように学んでないから。
- ・1人ひとりを見るには、教師の数が不足しているのではないか。
- ・日本人は、基本という文字に執着していて、人と違うことをするのが恥ずかしいという人が多い。
- ・講義的な授業が多いと感じる。
- ・教育が未開発な気がする。
- ・ドイツのシュタイナー教育などと比べて日本は硬すぎる。
- ・枠にとらわれた教育が多い。
- ・もっとしてみたい。やってみたいことをやらせた方がいいと思う。
- ・決められたことを皆で同じようにしている。
- ・考えが硬い。
- ・昔と違い、今は大人が大人ではない。
- ・教育が普通だから。
- ・「〇〇をやって下さい」よりも「〇〇ができるようにするにはどうしたら良いか」など考えさせることが大切。
- ・社会全体が異端に対し冷たい傾向があるので、成長過程で自分を抑える子どもが多い。
- ・テストで良い点をとるために勉強するということが根底にあると思うから。
- ・皆が型にはまってしまう。
- ・ルールで子どもの興味を縛り過ぎていて、経験が浅くなる。
- ・全員が同じ内容の教育（生きていく上で必要なことのみ）を受けているため。
- ・1つの考えや先生の考えなどを押し付けるように感じるから。
- ・他国に比べ、やる事が決まっていて、どちらかというと強制的にさせるような授業。
- ・何かに縛られて生活していると思うから。
- ・中学では、義務教育で決まったものしか勉強できない。自分の興味のあるものについて勉強が出来る時間があってもいいと思う。
- ・教育という型にはまってしまっているから。
- ・ただ知識を覚えさせているだけで、子どもたち一人一人にはあまり考えることがなさそうだから。
- ・形式の中でかためられた子が育っている。自分自身もそうである。
- ・学問が中心となっているから。
- ・形が決まっている。(教科書や自分のやり方以外認めない教師)
- ・独創的であると輪の中から追い出されるから。
- ・見本を見せてやっているから、結局は皆、

- ・同じものを作ることが多い。
- ・海外と比較して硬いと思った。
- ・皆と違う子どもは、皆と合わせるよう教育されるから。
- ・自主的に勉強したいという気持ちがありません、やらされている感じが強いから発想が貧しくなる。
- ・同じ教育を受けているから、あまり個性は感じられない。
- ・日本人的な考えにとらわれすぎている。
- ・全員が平等と言って同じことをやらせているから。
- ・答えが決まっている問題が多い。もっと多様な考えを持てるようにした方が良い。
- ・勉強の楽しさを知らない社会人になる。→ 努力・意欲の低下。CPUのような固定概念が染み付く。
- ・自由度が低い。
- ・皆が同じペースで進まないといけなから。
- ・言われたことを淡々とこなしているだけな気がする。
- ・皆、同じゲームばかりしているから。
- ・子どもの貧困。
- ・小学校の授業数が増え、夏休みさえ削って勉強させ、保護者は塾に行かせているが、子どもに将来を考える時間、何かをやってみようとする時間を作れていないから。
- ・常識にとらわれすぎである。「これが良くて、これはダメ」という答えが決まっています、(教育は) その正解に導こうとする。
- ・自由が少ない。
- ・硬すぎる。学校側からの押し付けが多い。子どもがそのときやりたいことを全て制御していて独創的にならない。
- ・保護者がする事しか真似しない。
- ・日本人は他人からの評価を気にするので、

人と似たような考え方になってしまう。

- ・小学校では、あまり自主的なことはさせていないと感じた。
- ・授業の答えなどに強制感がある授業が多い。
- ・自由が無さすぎる。
- ・「やりなさい」授業が多い。
- ・学校でのルールが多過ぎて、個性の1つも出ない。
- ・皆、平等に同じことを教育するから。

また、少数だが、「はい」と答えた人の理由は以下だった。

- ・最近では、考える授業が多いので、一人ひとりの考えが違い、独特な考えを持っている子も多いと感じる。
- ・自分の学びたいことを学ぶことができるから。
- ・国のレベルも上がっているから。
- ・自分の考えと向き合うから。
- ・割りと主体性を主にした授業が多いし、それにより独創的に世界が出来上がる。
- ・知り合いで独創的な子が多い。
- ・先生がそれぞれ教え方が違うから。
- ・話し合いや個人の意見を尊重することが多い。
- ・しっかりした教育法がある。
- ・色々工夫して授業をしたりしている。

以上のように、日本は独創的な子どもを育成しているとは言い難い。その理由として、教師が一方的に命令してさせる授業が多いこと。正解を求められる。考えさせる授業ではなく、強制的に何かをやらせたり、一律に同じことをさせ、はみ出すことを許さない。型にはめようとする。自由度が低い。といった

意見が多数を占めた。

このような教育のあり方を、道徳の教科書で検証してみる。

たとえば、1年生の教科書に、次のような話が載っている。

22 かぼちゃのつる

かぼちゃのつるがぐんぐん伸びて、みつばちが「そっちへのびてはだめですよ。そこは人がとおる道ですよ」と呼びかけた。しかし、かぼちゃは道を超えてスイカ畑に伸びる。そこでスイカや子犬が、ここはかぼちゃの畑ではないので、と注意する。でもかぼちゃはいうことを聞こうとしない。結局、そこへ車が通り、かぼちゃのつるを踏みつけてきてしまい、かぼちゃは痛いと言って涙を流す²⁾。

この話のテーマは、「節度ある生活態度」になっている。上述した学生たちの意見と照らし合わせてみると、確かにここでは、伸びようとするつるを押さえつけており、自由に成長するのではなく、成長を制約する、または、冒険心や自主性を規制しているように捉えることも出来る。

又、34 ゆめの学校 というものがある。ここでは、主人公が、学校では「早くしましょ」「並びましょ」など面倒くさいことばかりだと感じる。ある日、夢で、学校では、何でも自分で決めて良い、自由に良いと言われ、困ってしまう。そして目が覚めてから、それが夢であったことでほっとするという話である。

ここでも、「自由にする」ということについて、不自由さを感じる主人公を描くことで、「子どもなのだから自由に決められない」、「不自由と感じていても、じつは自分たちにとっては良いことなのだ」というある種の押さえ

付けが存在するようにも思える。

次に、4年生の教科書では次の例がある。

1 りゅつとずつと

班長になった女の子が、下級生を迎えに行って学校に連れて行くことが役目。

お母さんにしがみついて、学校へ行きたがらない久美という子を見て、いやな気持ちになるが、自分もかつてはそうだったと知り、久美の手を握り、「りゅつとずつと」と言い、学校へ連れていく。久美も笑顔になり一緒にずつと仲良く登校する。

ここでは、学校に行きたがらない子（不登校児）が、きちんと登校するようになるストーリーが描かれ、登校するのが良い子であり、普通なのだという視点で、はみ出した子を認める視点はそこにはない。

2 きれいなかさ立て

学校では、雨の日に、かさをかさ立てにバラバラに入れておくのではなく、かさを斜めに決まった形で並べて入れると美しく見えるという整理の方法と、それが上級生から下級生へ受け継がれていく様子が描かれている。ここでも、整然と並べられている傘に「美」を見いだすという1つの決まった形、それが良しとして提示されている。

たしかに整理整頓は必要かもしれない。しかし、こういう提示方法は、「かさ立てはこうでなければならない」という度を越した几帳面さや、場合によっては息苦しさをも感じさせるものともいえるだろう。

このように、道徳の教科書の内容は、「こうしろ、ああしろ、という押し付けが多い。」「自由度が低い」、「型にはめようとする」、「はみ出しを許さない画一的な教育」という学生たち

の意見と一致する。

おわりに

では、どのようにしたら、独創的で個性的な子どもが育つか？という質問に対し、以下のような回答を得た。

- ・自分を表現できるようにする。
- ・生徒だけで授業を展開する機会を作る。
- ・しつけを親がしっかりする。
- ・子どもの得意なことを見つける。
- ・担任を3人程に増やす。先生一人ひとりの性格や教え方の違いがあるので良い。
- ・子どもの可能性を膨らませる。
- ・子ども一人ひとりがやってみたいことが出来る。学べる環境があり、やりたいものが見つかると、創造する力を育てる。
- ・自分らしさを大切に、自分の考えを発表させたり、経験や体験を多くさせる。
- ・自分の考えを持つ授業をする。
- ・発言能力を身に付ける授業。
- ・幼少の頃から、他の子どもと違った教育をする。
- ・子どものやりたいことを自由にやらせる。
- ・自由時間を増やす。
- ・シュタイナー教育のように自由な発想をさせる。
- ・自分を表現する機会や作業を増やす。
- ・どんなアイデアも受け入れる。
- ・今までの日本の学校の概念をなくし、もう少し子どもが自由に出来る学校をつくる。
- ・1日1、2コマでもいいので、小学校に、幼稚園、保育園のように何でもして良い時間を増やす。
- ・1つのことをいろいろな方法で集中的に学び、一人ひとりの豊かな感情を押さえつけ

ない授業をする。

- ・子どもがやりたい事なるべく授業に取り入れる。
- ・先生や親が子どもたちの行動や考え方を否定せず、アイデアとしてとらえる努力をする。
- ・もう少し子どもを信頼し、子どもに任せるという大胆な教育をした方が良い。
- ・授業に沿った内容について、学校が細かく指定をせず、子どもがやりたい事をやらせる。
- ・テストや成績評価をせず、いんげん描写や成長の過程を評価する方が良い。
- ・1人ひとりのペースに合わせた授業を行いながら、子どもの個性が育つことも取り入れる。
- ・自ら考えようとする力を待つ。子どもの個性的な部分を伸ばすため、一人ひとりに合った課題を与える。
- ・休ませる時間、遊ぶ時間などを作った方が良い。
- ・乗馬やダンス、スケート、海外や美しいものに触れる、体験する機会を多くする。みなと同じ画一的な教育では皆同じに育ってしまう。
- ・1人ひとりが意見を言い、考えさせる。
- ・現代では、少しでも人と違うところがあると、それが原因でいじめなどにつながりやすくなる。もっと個人の個性をひろって出来る場をつくると多くの独創的な子が育つ。
- ・小学校・中学校から5科目に選択肢を作る。
- ・自ら何かをもとめ、実践するような事をするべき。
- ・シュタイナー教育を取り入れる。
- ・自由度を上げる。
- ・経験主義を重視し、発想力、創造力を育み、

実践力に反映される学びをする。

- ・記述問題などで、考えを書かせたり、いろいろな答えがある問題に取り組ませる。
- ・義務教育であるとしても、やりたいことを優先させる。
- ・規範の中で、もっと自由であるべき。
- ・他と違う子どもも個性だと考えさせること。好きなことを伸ばすこと。
- ・座学の割合を減らし、表現をすることをもっと取り入れる。
- ・海外の教育を取り入れる。
- ・自分で考え、自分で想像して取り組ませる。
- ・子どもを受容し、それを最大限活かす内容を個別に指導する。
- ・皆が個性を理解して、わかり合える環境があれば失敗しても否定されない。
- ・先生と子どもたちの間に親密な信頼関係を結び、子どもの意見の尊重などをしつつ、たまに先生の意見も取り入れてみるなどのバランスが必要。
- ・自由に考えさせる。
- ・アクティブ・ラーニングなど、自ら考えて発表する機会をつくる。
- ・教師が関与し過ぎない。
- ・グループディスカッション等を多くする。
- ・強制をせず自由な時間を増やす。
- ・自分たちで興味のある事を選んで学習させる。
- ・自分の意見を発表してもバカにされたりしないで、どのようなものでも肯定的に認められるクラス作り。
- ・子どもの興味・関心を大切にする。
- ・テストのための勉強も必要だが、子どもの興味・関心があるのかを知り、得意分野を伸ばすために出来ることを行う。
- ・個性は人それぞれということを、もっと社

会全体で受け入れ、テレビ番組等でも放送する。

- ・答えを一つにしぼらず、子ども一人ひとりの答えが正解になるような問題を出せば、一人ひとりの考えを尊重出来ることになる。私（僕）は間違っていないんだ、と思える教育をする。
- ・大人と子どもと一緒に何かをしたり、様々な経験をする必要がある。
- ・勉強以外のことに力を入れる。芸術・美術・図工・体育等でもっと楽しめて身体を動かせるようなことをする。教師が指示するのではなく、自分の好きにさせる。
- ・教えて学ぶだけではなく、いろいろな教育方法を取り入れる。
- ・1つの答えを出す教え方をするのではなく、シュタイナー教育のように、1つの答えを出すために、どんな方法があるかなど、選択肢を広げられるような教育をする。
- ・いろいろなことに率先してチャレンジする場を作ること。
- ・週1コマでも、法律もカリキュラムに縛られない、各先生が考える独自の授業があれば良い。
- ・「空気を読む」ことをしなくなること。
- ・子どもがやることに対して、すぐに叱らない。子どものやる事を理解し、尊重する。
- ・授業内で自由研究をしてみる。何を調べたいか、どう調べたいか、どう皆に伝えたいかなど自分で考えられるようにする。
- ・人の個性をそれぞれだと思い、尊重する人が社会に増えるべき。
- ・常に自分の気持ちや考えと向き合う機会を作る。
- ・現代では、少しでも人と違うところがあると、それが原因でいじめなどにつながりや

すくなる。もっと個人の個性をひろって出来る場をつくると多くの独創的な子が育つ。

以上の結果から、「自分で考えさせる」、「自由な時間を増やす」、「自分を見つめ、表現する時間を増やす」といった提案が多いことがわかる。また、「答えを1つと決めず、多様な答えがあるようなテーマについて考えさせる」、「どんな意見も肯定的に受け止める」ということが、独創的で個性的な子どもを育てる、と考えている若者が多いということが明らかになった。一方で、社会がもっと個性を尊重し、他とは異なる存在に寛容であるべき、メディアもそのような報道をすべきだ、という、学校教育という枠を超えたところに、答えを見いだす学生もいた。

新学習指導要領の道徳教育の目標には、「主体性を持つ日本人の育成」という言葉が入ってはいるが、実際にその教科書では、独自性や個性が伸ばしづらい傾向もあるということが、教科書の具体的な分析の結果と、若者たちのアンケートの照合により鮮明になった。今後、日本人が国際社会を生き抜くためにも、創造力や独創力を高める道徳教育はどうあるべきか、更に検討していく必要がある。

注

- 1) 調査の時期：2017年7月、調査の対象：教職科目を履修中の本学2年生102名。
- 2) 小学校学習指導要領（平成29年3月）3-4頁。
- 3) 村井実他『しょうがっこう どうとく こころつないで1』教育出版、52-55頁。

参考文献

小学校学習指導要領（平成29年3月）

小学校学習指導要領解説（平成29年6月）

村井実他『しょうがく どうとく こころつないで1』2016年、教育出版

村井実他『小学 どうとく こころつないで2』2016年、教育出版

村井実他『小学 どうとく 心つないで3』2016年、教育出版

村井実他『小学 どうとく 心つないで4』2016年、教育出版

村井実他『小学 どうとく 心つないで5』2016年、教育出版

村井実他『小学 どうとく 心つないで6』2016年、教育出版